

機能概念の美學への寄與

中井正一

一

こゝに機能概念と呼ぶのはヘルンスト・カツシラーによつて實體概念Substanzbegriffに對して機能概念Funktionsbegriffと呼ばれた所のものである⁽¹⁾。この概念が一般に機能と呼ばれる概念の純粹にして類型的のものと私には思はるゝからである。例へば既にリーマンが音樂のハルモニー論に用ひたる Lehre von der tonalen Funktionen der Harmonie⁽²⁾の意味もそれに關聯を持ち、エミール・ウテイツの Die Funktionsfreuden in aesthetischen Verhalten⁽³⁾或はオスカール・シェレンメルの人體の藝術的構成について Die Funktionsgesetze des menschlichen Körpers⁽⁴⁾と呼んだもの、ホル・テイ・フランクの Form and function⁽⁵⁾及新しき建築家ル・ナルビュジエ、ピエル・ジャンネレ、ワルテル・グロピウス、フリッツ・ブロック等々の提唱する gestaltende Erfüllung der Wohnfunktion⁽⁶⁾の意味するところのものが又その見地より振返らるべきであると信するが故である。

一般に技術の概念の考へ方が従來のそれより重視さるゝ今日、それにもなつて機能の概念が深い反省を受くるは當然であらう、殊にフランクフルトに於てかゝる運動が強い流と成つて動き、デッサウエルはそのよき指導者となつてこの技術概念を哲學的反省にまでもたらし、⁽¹⁾社會的義務闘争の構成をすら機能的に考察せんとした事は、有ゆる文化的構成組織に向つて、機能概念がもつ意味の深さをわれわれに示すものである。

勿論カツシラーの機能概念は純粹に論理學自然科學に限られてゐる。最近の彼の思想としての象徴的形式的考へ方に於て、生命の領域にまでそれがもたらされたとは云へ、それは論理の核の内側よりしてゐる。今こゝに成されるのはそのもう一つ他の側面よりせられたるの試みである。

かくて私はカツシラーの「實體概念」と「機能概念」の關係を思惟の軸として、この小論を進めたいと思ふ。勿論機能概念的考へ方が思惟の最高の又最終のものであると云はうとするのではない、只その考へ方によつて、美學の特殊問題が如何に配列され、如何に構成せられるかが考察されるのである。

(1) Cassirer, E.: *Substanzbegriff u. Funktionsbegriff*, 1923. 英譯 *Substance and function*, transl. by W. C. Swabey, M. C. Swabey.

和譯抄述、實體概念の關係概念。(馬場和光)

- (11) Riemann, H.: Handbuch d. Harmonielehre. 1880, 10 Aufl. 1929.
- (12) Uitz, E.: Die Funktionsfreuden in aesthetischen Verhalten. 1919.
- (13) Gropius, W. Moholy-Nagy, I.: Die Bithne.
- (14) Frankl, P. T.: Form and Reform.
- (15) Block, F.: Problem des Bauens.
- (16) Dessauer, F.: Philosophie d. Technik. 1927.
Kooperative Wirtschaft. 1929.

二

一般の知識の進歩にもかゝはらず、形式論理學だけはアリストテレス以來進歩もせず退歩もしなかつた。此學はあたかも既にその發展の頂點に達してゐて、問はるべき何ものをも持つてゐないかの如くであつた。

しかし、十九世紀の科學の發展を寂かに顧ればそこに全く新しい思想のあらはれたのを知るであらう。一方に於て科學の基礎に關する解釋に就ての仕事が漸く怠られ勝ちであつたにもかゝはらず、他方に於て復素數論との接觸によつて、新しい問題の領域が展開し始めた。此問題は更に純粹數學のみならず、各々の自然科學の問題にも關聯して、凡ての論理的問題の中心となるにいたつた。かくして、長らく無條

件的に確かなるものとされて居た形式論理學は其根柢を新しく批判されなければならなくなつたのである。

從來の形式論理學に於ける概念の本性に關する見解は次の如くである。先づ最初に無數の性質を有する個々獨立の物の存在が假定せられる。しかるのち此多くの物の性質の中より多くの物に共通なる性質が抽象せられるのである。此同一の性質を有する物體をわれ／＼は一つの類に結合する。概念は斯くして生れるので、それは決して現實と全然關係なきものではなくして、その現實そのものゝ一部分にしかすぎない。かゝる考へ方によれば嚴密なる數學的科學の概念も記述的科學の概念も同一階級に屬することゝなる。此概念は其内容が少くなるにつれて外延が擴大して行く。かくて、「概念角錐」Begriffspyramidが成立し、其頂點は抽象的なる「或も」の「Etwas」の表象に終る。此が即抽象說 Abstraktionstheorieなのである。⁽¹⁾

しかしこゝに疑問が生じる。かゝる考へ方は、遂にその結果全く空虚なものに至り盡すのではあるまいか。科學的概念の要求してゐるものは、表象の無内容性ではない筈である。寧ろ内容の嚴密なる一義的規定であつた筈である。ロツチエのあげた例を引けば、「櫻の實」と「牛肉」を只「赤い水氣のある物體」と云ふ共通な表象の群に

配分したとしても、それは妥當的論理的概念に達したのではない。それは唯無意味な言葉の結合にしかすぎない。かゝる一般的形式的考へ方は其だけでは決して充分ではない。そこにそれを補ふ新しき思想的規準を必要とする。

すでにアリストテレスに於て、例へば生物の種族の概念は單に抽象的なる言葉ではなくして、同時に個々の生物が其に向つて進んでゐる所の目標、並に其生物を導くところの内在的力を表はしてゐるのである。アリストテレスの實體の概念はすでにそこに立脚してゐたとも考へられる。そこに近代論理の深い關心があるべきであらう。

ポアンカレがすでにそれを指摘した様に、カツシラーもかのミルのなした論理の記憶心象的解釋に反對の態度を取る。ミルに取つては、丸い四角の矛盾するのは直觀が吾々に丸いと云ふ印象を與へる時には何時の經驗に於ても四角なる印象が缺けてゐるからであると言明する。かくて幾何學の命題は悉く一定の表象群についての主張となつてしまふ。いかなる多くの記憶の重りも、決して一般を主張することが出来ない以上、これは數へること、測定することについてその根柢的困難をもつであらう。ミルはこれを再生 reproduction によつて説明する。即元の表象に相似

な表象が再生されて幾何學的形像を形成するので、それは具體的な新しき關係の概念ではなくして、記憶心象の再生にしかすぎない。

しかし、それは果して可能な事であらうか。實際、決して正確な直線も點も平面もない。單に物理的のみならず、心理的存在にも見出し得ない。何故なれば、われわれの心の中にも決して數學的點の表象は見出し得ない。常に見出さるゝものは幾らかの感覺的擴りを持つたものである。幅のない線の表象と云ふ如きものは存在しない。寧ろそれは關係の判斷の上のみ見出さるゝものである。

もし記憶表象に論理學がその基礎をもち、形式論理學の如く特殊より一般に論理が進行し、下級の概念が高級の概念に進行する思惟の過程は結局單なる Negation に終つてしまふ。カツシラーは、皮肉を含んで云ふ、即忘却と云ふ天惠の事實が概念構成の基礎となる。若し過去の記憶表象が全く前と同じ生々しきをもつて常に再現するならば、舊い表象が新しい表象と別なものでしか、同様なものであると考へられて一つに融合することは非常な困難を伴ふであらう。寧ろ再生の不確實さが初めて各要素の異なる點をまとめてその中の共通なものを綜合することが出来るのである。この考へ方を押進めるならば、われわれが與へられたる直觀に適用する論理

的働きは、唯漸次吾々より遠去り影を潜めるものゝ爲めにのみ役立つて居ると云ふ奇異な結論に達する。

かくの如き結論と嚴密科學の觀察とは直接に相反してゐる。

ロツチエの論理學に夙に指摘さるゝ如く、例へば金、銀、銅より金屬なる概念を作る際に、只抽象的に個々の性質の消却によつて、金屬の概念には赤でも黄でもない又特殊の比重をも持つて居ないといふ表象丈では足りない。寧ろ、積極的に何等かの比重或は硬さを有し、何らかの色を持つてゐると云ふ考へ方があるべきである。この考方をつき進めるならば、概念構成の際に除去せられる個々の特徴のかはりに、先づ凡ての個々の特徴をもつて、一つの關係を決定してゐるところの複合的要素を全體の姿をもつて捉へやうとの要求に導かれる。

概念の論理的規定は、超時間に妥當する關係が理念的全體に配列さるゝ事に依つて決定されるので、個々の具體的時間に制約さるゝ感覺的表象並に記憶表象に依つて與へられるものではない。概念の本性は其が理論的に何を意味するかと云ふ事にあるので、心理的に何であるかと云ふ事にあるのではない。

心理學に於て表象とは個人により、又時と所によつて變化する所の一定の精神的

内容である。随つてそこに與へらるゝものは時間的に制限され規定せられたる現實であつて、不變な論理的同一性の中に確保さるゝものではないのである。而もこの後者こそ純粹なる論理的概念の意味が認めらるゝものなのである。他の表象より大なる又は小なる「表象」或は二倍又は三倍大なる「表象」とか云ふ事は全く無意味である。關係とは既に一つの論理的機能であつて、心理的表象ではあり得ない。

三

十九世紀に於て著しく發達した高等數學の研究の運動は、この論理的純粹性の反省について大いなる飛躍をもたらした。その傾向を代表するデバッキントはその論の中に言ふ。「吾々がもし集合又は物の集りを數へる時になす行爲を詳細に觀察するならば、吾々は物を物に關係せしめ、物を物に對應せしめ、又は物を物によつて模寫する所の之無くしては、凡ての思惟の不可能である所の精神の働きを認めるであらう。此唯一の、又他の思惟に於ても缺くべからざる根柢の上に……數の全科學が建設されなければならぬ」。この言葉は非常に示唆深きものであると共に一つの誤解をも伴ふところのものをも含んでゐる。カツシラーはそれに註釋づけて云ふ。此處で物、或は精神の働きといふ言葉が用ひてあるけれども、しづかに見るならば此語

には全く新しい内容が興へられてゐることを知る。此の「物」とは決して凡ての關係以前の獨立な存在を意味しない。寧ろ其は數學者の云ふ物である限り、數學者によつて云はるゝ機能的關係によつてのみその全體の内容を得るものなのである。「模寫」と云ふ事もデッキントの云ふ意味は、われわれがそれによつて多くの異なる要素を一の全體的體系に綜合する處の思惟的配置 (gedankliche Zuordnung) に過ぎないのである。此處には系列的要素を系列的原理に従つて結合する事が問題と成るので、何等事實的なるものに一致するか否かは問題とは成らない。「模寫」とは決して新しい物を作る事ではなく、思惟進行と思惟對象との間の新しい必然的なる秩序を意味する。

デッキントのなした順序數より基數への移行の論理的解釋は、更に大きな機能概念的獲得をもたらした。それは「組織」とその要素の間の機能的關係について多くの示唆をもたらす。云は「要素がその屬する全組織を代表することの意味を決定する。カツシラーはそれについて、それが數學的内容に於てよりも、基數の構成に於て新しき論理的フンクチオンが働いて居る事に注意すべきを論ずる。順序數のみに於ては個々の進行は其自身として決定せられ一義的繼續として展開されたのであ

るが、今や系列を其個々の要素の前後に就てのみでなく、系列全體を理念的全體として理解しやうとの要求がそこに現はれてゐる。此綜合に依つて初めて順序數の單なる繼續が統一的なる完結せる組織になるので、そこでは各々の要素は既に自身のみで存立して居るのではなく、同時に全系列の構造と形式的原理を代表する。こゝにわれは「組織」の概念の新しき装ひを見出す。新しき構成をもつてする論理の機構メカニズムがその姿を現はす。記憶表象による形式論理の全體と部分の概念には、積極的なる機能的働きの複合としての構成概念が排除してゐるに反して、この新しき論理的フンクチオンに於ては凡ての要素がその組織そのものを背負つて、その複合的關聯のもとに全體が成立する。かゝる概念は全體ゲンツと呼ばんよりは、一つの有機體オルガである。何故なれば要素其自身が自らの機能的組織をもつてゐるからである。即ち全體の部分としての擴りある大きさではなくて、互に規定し合ふ關聯的組織に融合する函數形なのである。

かゝる考へ方は即ち凡ての量的考へ方を、位置的に換算することであり、引いては同等性の問題に大いなる變革を興ふることを意味する。かゝる機能的概念に於いて等しいと云ふ事は *equivalent* 等値である事を意味する。即ち一つの集合の要素に他の

集合の要素が一義的に配置することが出来ることを意味する。この事は先の「組織」の概念の轉換とともに、一見平凡なる事ではあるが深く省ることでそれが藝術的或は社會的領域に構成的徵標として意味づけられてゐることに氣付せられるものがある。

四

論理がかくの如く心理性より脱落する事によつて、こゝに主觀及客觀の概念が特殊の様態をもち來ることゝ成る。

カツシラーはこの對立概念は機能的概念よりすれば、寧ろ消滅し解體さるべき事を提議する。

形而上學の犯した罪は、單にそれが認識論の領域を踏み越えたることにのみ止まらず、認識の領域内に於ても、函數的關聯のもとにある分離すべからざる要素を、不當にも分離して考へ、論理的相關性にあるものを物的對象として扱ふごとき誤謬を犯してゐる。形而上學は傳統的に屢々、思惟と實在、主觀と客觀、物と精神等を各々分離對立した「もの」として論じすぎた。或時は「現實」とは變化と運動であり、「概念」とは同一と不變であると考へられもした。かくて形而上學の歴史は此等の誤つて對立し

た概念の消長の歴史にしがすぎなくなつた。現代に於ける唯物論的考へ方にも、又この形而上的解釋を見出さしめるものが残つてゐる。

然しかゝる形而上學の論争とは別に、經驗科學は常に不斷の統一的組織を維持してゐる。此處でわれゝの關心はその對立せる概念の何れが根柢であるかと云ふ事ではない。寧ろ興味あるとすれば如何なる見地より如何なる必然によつてかくの如き分離が行はれたか、問題なのである。

例へばこゝに主客未分とも云はるべき直接經驗の體驗を反省するとする。そこに何の觀察點もないとすれば、そこには反省もない筈である。それがもし反省である以上一つの觀察點をもつ。かくて、すでに體驗そのものは——もし當嵌めるとするならば——客觀の概念に屬するであらう。何故ならばその場合その内容は常にわれゝが「物」と云ふ考へ方に與へてゐるところの受動性、又所與性を判然と具有してゐるからである。しかし、それが反省である以上それが僅かでもあれ現れたる最初の瞬間に於いてすら、已にそれは論理的統一と綜合の下に在る。そこでは單なる消極的心理的抽象性は後退して、科學的理論が成立し、更に更に高次の理論へと展開して行く。こゝに所謂「主觀」と「客觀」の分裂があらはれる。即、認識の目標は高次の

發展にあるけれども、その「度」があることを知る。即制限せられたる範圍に於てのみ妥當するものと、更に擴げられたる範圍に妥當するものとが現はれる。こゝに認識の變化的要素と不變的要素とがあることゝなる。カツシラーではこの變化的要素が主觀的側面であり、個物的特殊の條件によるものと考へられる。そして、他方恒常的要素が即客觀的と考へられる。勿論此等のものは相對的なる轉換的ヒエラルカイヤを構成するものである。絶對的に變化的なものも、絶對的に恒常なるものも理念として可想的であるにすぎぬ。只比較さるゝ他物によつて、變化的とも恒常的とも云ひ得るのである。カツシラーに取つては現在の状態は過去のそれに對して客觀的と考へられると同時に、現在の状態は未來のそれに比して主觀的と考へられる。即その間には函數的關係が成立するのみである。主觀と客觀を内界と外界の區別をもつて表はさうとする空間的表現はこの關係を不分明にするが故に不當である。それは理論的關係を物の絶對完結に歸着せしめるからである。

一の法則が更に進歩せる廣い領域に妥當する法則によつて置換へられる時、前に客觀的と考へられたるものが全く他の主觀的なるものに變化して、凡ての客觀性を失つたのではない。唯以前に無制約的に妥當して居た者が一定の條件の範圍に制

限されたにすぎない。換言すればわれはこゝに妥當の階段性 *Stufenfolge* in der *Graden der Objektivität* を見出すのである。

そして、形而上學的立場では主觀と客觀、内界と外界との連続は遂に不可能であるに反し、この立場では主客は分離すべからざる函數的關係にしかすぎなくなり、一つの事柄が種々の論理的關係點の相異により、主觀的とも考へられ又客觀的とも考へられ得るのである。

寧ろ「主觀的」なるものは、決して與へられたる確然たるものではなく、其れから又世界の綜合がなさるべき出發點ではなく、只内容相互間に於ける法則的關係の妥當を前提とせる分析の結果である。

内界外界の對立も、現實の問題が空間の問題とのあやまつた結合によつて成生され、形而上學の大きな問題の一つとなつてゐた。カントでさへ物自體の問題を解くには、たとへ圖式の問題によつてそれは深い示唆をあとにのこしたとは云へ、空間の理論を前提としたのである。

その後の、又カント研究者にとつても、此の經驗概念の批判は空間概念の形而上學と密接なる關係をもつに至つた。寧ろ主觀並に客觀が相對的に函數的關聯として

解釋された様に、空間も一つの組織的構成と考へられ、こゝに内界と外界の概念も函數的關係としての特殊の構造をもつべきであつたのである。

(1) Cassier: *Ibid.* S. 1-7.

(11) *Ibid.* S. 46. Dedekind: Was sind u. was sollen d. Zahlen ? 5 Aufl., 1923. S. IV

五

かくして、實體的概念より機能的概念に觀點を更へる事で多くの觀念型態の變革をこゝに見た。例へば記憶心象としての實體概念が論理の領域より放逐さるゝ事で、純粹なる關係の學としての函數的論理がその姿をあらはす。そして、その論理は形式論理の如く、あゝでもないかうでもないど、個々の特徴を捨去つて、遂に抽象的な「或もの」にまでもたらされたる忘却されたる記憶心象によるのではなく、先づ凡ての個々の特徴をもつて、一つの關係を決定してゐるところの、複合的要素を全體の姿をもつて捉へやうとする函數的關係がそこに要求される。即形式論理では全體と部分とは積極的な機能的働きを缺いてゐたが、この論理では、凡ては有機的組織として、各要素はそれ自身一々の働きをもつて、一つの複合的關聯的組織を構成することゝ成つたのである。このことは凡ての量的な考へ方を位、置的、な考へ方に換算すること

であつて、相等的いと云ふ事もこれまでは量的であつたのに、機能論理では位置的に等値であることを意味する、即一つの集合要素の他の集合要素への對應的關係を指すのである。

かくして、主觀及客觀、形式及内容の構成が特殊の様相をもつて來る。これまで論理の領域に於ても主觀客觀の概念は形而上學的に分離したる對立的なものとして論じられすぎた。これについて機能的考へ方は轉換的ヒエラルカイヤとする。一つの法則が更に進歩せる廣い領域に妥當する法則によつて置換へらるゝ時、先の客觀的と考へられたるものは他の主觀的なるものと變つてしまひ、妥當の階級性に於ける轉換的要素と成つてしまふ。かくして形式と内容の對立も、より廣き妥當の領域にむかつて向ふところの方の類型 Types として、關係の構成的組織の中に溶融する。

かゝる論理的領域に於ける飛躍は、一方社會的考察のみならず、美學的領域に興味深き反省をうながすものがある。かつて、實體、統一、相等、主觀客觀、形式、内容と呼ばれたるものが、いま、函數型態、組織、等値、構成、機能等の言葉をもつて呼ばるべく、その關係を轉ずるのである。

六

プラトンの二世界主義がアリストテレスのキネジスの概念で一元的に連続せしめらるゝにあつて、形相アイドスの意味が特殊の構造をもつた、潜勢ポテンシスと現勢エネルガイヤの概念をもつて素材と形相が結ばれて、形相はその實現への働きの中に内在する。従つて形相としてのヌースヌースも種々の意味で素材の中に内在する。彼はこのヌースを分つて二つとし、理論的のものνοῦς θεωρητικὸςと實踐的のものνοῦς πρακτικὸςとに分ち、前者は科學的研究の對象ἐπιτηθέμενονであり、後者は合理λογικόν的研究の對象ἐπιτηθέμενονとなる。前者は靜觀に於ける理性即叡知 *θεορία* であり、後者は技能に於ける理性即技術 *τέχνη* である。一つは純粹に理性が己自らを省るところの知的領域であり、他は意志或は想像の如き身體構造にも關聯せる領域である。かくて彼では技術の概念は非常に大きな領域に展開して、倫理、社會、藝術等の所謂實踐的なるものゝ殆んど全部を覆ふ。そしてそれは素材と形相の連続に於て、一つの連續的力として、働きとして重要な任務を負へるものと成る。そして技術が倫理的領域である限りに於て、それは社會科學 *πολιτική* と呼ばれ、もしそれが製作的技術に關聯し、藝術的領域に關する限りに於て、生産的創造 *ποίησις* と呼ばれる。かゝる意味でアリストテレスに於て、内面的思惟の反

省に於ける靜觀の外のものは、凡てテヒネト、技術の領域にあつたのである。いはゞ目的的働きの中にあるもの、その意味の實踐的のものは凡て技術の中にある。そしてそれは社會科學に於ける並に生産的創造に於ける合理化的研究よ、*λογιστικόν*を指したのであつた。そして、目的的事物はこの觀點のもとにその形相を見定めらるべきであつたのである。

こゝに私は技術科學のもつべき機能的論理の最も遠き示唆を見出す。アリストテレスに於て、すでに生物の種族はそのまゝ個々の生物がそれに向つて進んでゐるところの目標と、その生物を導いてゐる内在的力を意味してゐた、即機能に即したる實體概念が彼の論理の要素であつた。それと同じ様に家の概念も形相へ導かるゝ素材の四つの原因による構成體を意味した。われ／＼はかゝる機能的構成として、道具の概念を檢討して見たいと思ふ。

それが道具である以上、人間の生活の中に内在する目的の下に、自然の要素が構成さるゝ事を意味する、その場合われ／＼は目的の定立の仕方によつて、道具はいろいろの構成をもつてあらう。例へば窓の概念に於て、これまでの心理的心象による概念構成をもつてすれば、ジェイムスの重なりたる寫真に於ける表象に於ける如く、多

くの窓の記憶表象の重なりより來る、忘却を通じての抽象化、即その漠然たる一般的表象が窓である。反之機能概念としての窓の表象は、照明、通風、展望、度の三つの要素の複合としての構成體である事を示す。その各々の要素のパーセンテージの増減によつて、特殊の類型を生ずることとなる。そこに技術家の所謂極限存在 Existenz-minimum の概念が生ずる。極限的完全への問としての存在の考へ方が生れる。かゝる意味での存在とは一つの實驗を意味する。存在は一つの實驗である。

例へばこゝに軍艦の概念を検討するとする。記憶心象による軍艦は時々刻々に變化してゐる。明治時代に軍艦と呼んだものを頭に浮べるものにとつて、現今の軍艦は一つの怪物にしかすぎないであらう。こゝに所謂記憶を地盤とする表象をもつて論ずるとするならば、そこには何の一般をも導くことは出來ぬであらう。こゝに技術科學に於ける論理に於て、心理主義的表象が如何に力弱きかを曝はにしてゐる。そこで技術家は軍艦の概念を如何に取扱ふか。云はゞ彼等にとつて、軍艦とは、水上に於ける攻撃、防禦、運搬、居住等の要素の複合的構成である。その攻撃、防禦の要素のパーセンテージの多き場合はそれが戰闘艦の類型を構成するのであり、運搬の要素のパーセンテージを増加することによつて巡洋艦或は驅逐艦の類型を構成す

る。しかも、その各要素は互に相反的に相矛盾して否定し合ふ。例へば居住性要素を増加することは戦闘性要素を減ずることであり、又各々運搬性要素と相克してゐる。その凡ての要素の函数的複合が軍艦なる概念の構造なのである。かくて、プラトンの形相に於けるが如く、一つの概念には一つのアイドスが對應する。只在るもの、存在するものはそのアイドスの影であり、一つの實驗にしかすぎない。一つの何年型かの類型に於てその存在的不備が発見さるゝならば、その瞬間より、それはその概念の存在性を失ふのである。かくて、存在は常にその年次型と、その標準化性と類型性をもつことゝ成るのである。

そこでは記憶心象とは不備と失敗の連続にしかすぎない、そして、概念こそは常にアイドスを裏付けたる無限なる實驗をこそ意味する事と成る。例へば記憶表象としての飛行機は落ちるものであり、そして飛ちざる飛行機とは一つの虚偽概念であつたのに反して、機能概念をもつてするならば、落ちざることはその概念構成の一つの要素である。それが落ちることは繰返さるゝ悲しい失敗の實驗の連続である。その消去こそが飛行機の概念構造である。多くの論理書に於て、虚偽概念の引例は死せざるソクラテスと飛ぶ風船であつた。しかしその虚偽概念こそが醫術の理念

であり、機械の夢である。そして既に風船は飛んで地球を一週し、多くの技術科學はすでに多くの論理書の虚偽概念を覆しつゝある。しかも、その展開こそが技術科學の論理そのものを構成するのである。又そこにこそアリストテレスの *λογιστικόν* の意味があるのであるまいか。

建築工學の國際性は家具の領域にまで、その標準化運動をもたらした。フランクフルトより起れる運動はその意味で注目されるべきであらう。「家は住む機械である」と云ふ新しい命題が、今や凡ての物の上に考察されつゝある。有ゆる器具が機能の上に考察されその上に美的要素を見出さんとする傾向をももつて來た。この時にあたつて、美學は殊に美的假象論をその基礎材としてゐる獨逸美學は深い反省をこの機能概念の上に喚び起す事を要求されてゐる。私はこゝに未だカツシラーで問題にされざる技術の問題が、彼の意味する機能概念の深い發展であると考へたいと思ふ。

(1) Das Neue Frankfurt. 1930. 2. 3. S.71.

七

今美學の上に殘されたる問題の最も大きなものをこゝに三つあげる事が出来る

であらう。それは過去の美學の解き残した問題であり、しかも現今最も激しくその解決を迫られてゐる問題でもある。

一つは單純感覺の美感の根據づけの問題、二には有用的なるものが有用なればなる程美であることの純粹感情的立場としての理由づけの問題、云はゞ美的無關心論の問題、三つには藝術創作、或は演出に於て、その創作そのものゝもつ美感乃至快感の理由づけの問題がそれである。

例へば、赤い、色なら赤い色それ自身が只そこにあるだけで限りない愉悅を人にもたらす場合、ヴァイオリンの温かさ、甘さ、新鮮さはたとひピンゼルの一觸ですらそれが愉悅である場合がある。只一人ピアノに向つて鍵盤を只打つことでそれに無心に聞入る場合がある。夜半鐘聲のかすかなるを聞く場合、それがたとひ樂音でないにせよ、その單純なる音そのものが只聞くことに愉悅をもたらせることは深い問題でなければならぬ。リーマンは、ライプニッツが音樂は音の數學であると云つた命題を函數的關係にまでもたらしめて、一つの *Order* の音は深い聽覺にとつてはそれとともにあるところの無限なる長音階と短音階の一連續系列を意味し、一つの「音の構成」として特殊の記號をもつべきを主張する。即一つの單純音はそれ自身無限

なる對象的關係としての音の構成の力の緊張として存在する。聽覺はその深い「魂」の數學的構成の内に無心に沈み行くとも云へるであらう。即單純音それ自身はその機能的構成の中に一つの存在的情趣をもつとも云へやう。

私はこゝで西田博士の色に就ての深い考察を想起する。「超限數の場合、順序數が基數と離れてそれ自身の實在性を有つて來る、超限數に於ては順序數は特別の取扱を受けねばならぬ、是に於て理想的なるものが實在的となる、關係が實在となるのである。例へば赤の感覺的經驗がその飽和度に従つて配列された時、赤の飽和度といふことが此集合の順序型と考ふべきであらう。此系列が無限と考へられた時、赤の順序型が實在性を有つて來る。無限なる進行が可能であるといふことは、型其物 Typus が力を有することである。最終の要素がなくしていつまでも次の要素に移り行かねばならぬと云ふのは、要素はその背後に横はれる或物の表現であつて、背後の或物が實在であり要素はその限定に過ぎぬといふことである。是に於て赤と云ふ型は一つの力となり、一つの作用となる。無論此力はまだ物體的とも精神的ともいふことはできぬ、兎に角、赤といふ現象が無限に現はれ得ると云ふまでである。此の如き力を表はすものがカントルの超限數とか極限數とかいふものである」。(二)かく

の如き叙述の中に私は單純感覺そのものゝもつ深い關聯的組織の暗示を示されるのである。勿論その組織の解明がカントルの超限數で盡されてゐるか否かは知らないけれども、人の感覺は反省的判斷として、赤の個別の中に限りない組織の類型を見盡すとも考へられやう。ゾアーミリオンの中に甘さを溫さを、新鮮さを、涯は人の滲透ほる熱情を見る心境の中には、すでに自我が社會なる關聯の中をも出入して、その中に自分を類型的に位置づけ、或は味覺、溫覺の組織の中までをも感覺は相入して、力の類型としての赤と互に等^{エクイヴァレンツ}値な關聯の下に共通^{グライ}感覺^{センジン}を構成することも考へられやう、かくして、單純感覺の領域にこそ、無限な複雑なる感覺の複合を見出すも考へられやう。そこでは見る自我はすでに社會構成の一要素ですらあつて、その關聯のすがたに於て、色の構成に面する以上、身は色の中に溶融し、赤そのものに身をもつて等値ならしめるとも云へやう。即そこでは見るものは見らるゝものゝ中に在ることゝ成る。藝術的感情の最も深きものはかくの如き關聯の中にあるとも云へやう。ギュヨーの言葉を借りて、美の感情は調和に於けるソリダリテとユニテの感情の高い形式にしかすぎない。それはわれわれの個人々々の生命の内面の中に見出す社會の意識である、と云ひ得るならば、社會なる深い組織の構成要素である自分がその

中に自らを位置づける様に、色の内面的構成の一つなる「赤い色」の位置づけの中に更に深い組織的關聯を發見することは、組織の内面に見出すより深い組織を意味する。ソリダリテの中にソリダリテがそのより深いすがたを映すとも考へられやう。そして、一つの單純感覺は無限に疊れるソリダリテとユニテの構造の内面を見透ほす能産點と成るとも云へやう。組織と統制の意味に於て、社會の中に一つの音樂を聽く様に、音樂の中に一つの社會を見出せないと何うして云へやう。一つの色、一つの音、一つの母音或は子音それがすでに深い組織と統制を曠い背後に擔つて居り、それに觸れることは、全生命の組織の凡ての關聯を搖り動かすことを意味する以上、單純感覺はそれ自身深い美的複合の一基數であることを失はない。それは云はゞ、單純感覺が常に一つは機能であることへの注意の喚起である。多様の統一としての美學では、單純感覺は被統一體としての一個物であり、何の積極的働きをもたなかつたのに反して、今機能概念の見方をもつてするならば、單純感覺は無限なる積極的關聯體として、云はゞ一つの個物、ではなくして、深い關係として具體的なる一般に關聯してゐる。深き意志に關聯してゐる。

(一) 西田博士「意識の問題」一三二—一三三頁。

カントの美的無關心に次いで、シルラーの遊戲衝動説、ヘーゲル、ハルトマンの美的假象論以來獨逸美學の礎石の根柢には「美が假象シキヤインである」の考へ方が可成深い根を降してゐる。プラトンに於ては美が現實の模倣であるが故に、藝術家を理想國より追放せよと命ずる。反之、シルラー及フリドリツヒ・フィツシャーによつては同じ様にそれが假象なるが故に現實より優位性を保つて、その假象の世界、遊びの世界に於てのみ人は完きを得ると論ずる。⁽¹⁾この美的假象論に對して、故深田博士は三つの思惟過程をもつて、これに警告を與へんとせられた。⁽²⁾第一に於ては現實の寫しであり、模倣であること見られた藝術品が先假象の名で呼ばれる。第二に於ては此假象が現實から一步遠ざかつたものとして一種優越な趣を有するものとせられる。而して第三に於ては現實から一步遠ざかつた假象が實は實在であるとせられる。第一の見方なしには、美的假象の考は起らない。第三の見方に達しないでは美的假象の考へ方は徹底したものは云へない。而してそれはすでに假象が假象として止まり得ない階段ではあるまいか。

云はゞ假象論の誤謬の根柢には次の如き混同があると云はなければならぬ。

即現實と美的假象の對立が、そうではないのか、はらず背反或は並列的對立と成つた事である。例へばシルラーの遊戯衝動説に於ける如く、現實に向ふ心の欲求と並列して、現實を打越えて縛られない自由の境地に突き進まうと云ふ欲求が我々の心の底にある、と云ふ二元の葛藤の構造をもつ。

更に細に分析するならば、藝術作品の構成要素が材料と對象と形式であるとするならば、藝術品が藝術品たる事、美的對象の美的對象たる所のものを規定するものはこれらの雜多なる要素の複合としての統一されたる原理即第二次的—時間的意味ではなしに—印象としての情趣微分 *Stimmungsdifferenziale* も云はるべきものである。^(三〇) クリスチアンゼンの指摘せる如く、我々は「何が美的對象を構成するか」の問に對しては、情趣微分が其構成要素であると答へ、「何處に美的對象の居所があるか」に對しては、情趣微分の自らなる緊張と其緊張がそれ自らの安定に向ふ發展的運動の中に在ると答ふるべきであらう。美は何等かの意味で「純粹なる形」でなければならぬ。何等かの意味でそれ自らの中にそれ自らを基けてゐる原理を持つてゐなければならぬ。現實的要素に伴ふ所の第二次的印象と見らるゝ情趣微分それ自らの發展を美的對象の本性と規定する事は即そこに其自らの原理を認むる事であり、美を最も嚴密な

る意味に於て「純粹なる形」と認むる所以である。コーヘンがなさんとした試みも又かゝる視點に於てはあつた。かゝる意味でそれが第二次的印象であり、それが現實より遊離するとして、假象性を論ずるならば、それは比較的正当なる論歩を辿るものであると同時に、しかし、それは心然的につひに美的無關心論にまで到達すべき運命をもつ。

美的無關心論とは美的對象の組立が他の對象とは全く趣を異にして、美的若しくは觀照的態度に特殊なる性質をもつことを指す。即第一にはそれが所有の慾望より自由にさるゝこと、第二にはそれが客觀的屬性と對立して主觀的印象であること、第三はその觀照的態度が受動的であることをもつて、それが眞及善の對象とその對象を異にすることを指摘する。假象論の到達する最後の結果はこの無關心論とも考へられやう。

しかし、私達がこの無關心論で注意すべき事は、第一の美的觀照の態度が慾望より自由にさるゝ事については、われわれは次の事に注意すべきであらう。即それは、目的について手段を講ずること、le raisonnementと、目的を感ずること、le sentimentとは同一でないことである。慾望の中に大いなる目的を感ずることはギュョーの命の感じ

le sentiment de la vie の意味に於て正しく深い意味で無關心的であるとも云へやう。⁽⁴⁾ 存在の大きいなる隔りの意味即關心の中に身を委ねる意味に於て、そしてそれを純粹に感ずる意味に於て、それはより深い無關心ですらあるであらう。生物函數論が問題となり、生理學が函數論的傾向を帶ぶる今、内感覺の快適性は深い無限の組織的關聯とその目的への深い反省的判斷としての評價即目的を感ずる意味で、目的なき目的を感じ、關心なき關心の把握ですらあるであらう。この事は内面的技術即身體構成の技術に關聯するならば藝術創作、並に演出に於ける所謂呼吸、イキ、コツの意味を合理づけるであらうし、更に外面的技術即社會的構成の技術に關聯する集團的構成美或は性格美のもつ意味を合理づけるであらう。前者では生物函數的、生理函數的領域に目的を無限なる組織の層性の中に感ずるのであり、後者では物理的、機械的函數領域に目的を機構と構成の關聯の中に感ずるのである。其は肉ではなく、物ではなくして、すでに深い秩序を、組織を、そして統一より統一を見透す深い關聯を意味するのである。こゝに目的の觀念の異なりたる見方が生れる。即慾求としての心理的見方を脱して、その慾求をも内面的要素とする所の大きいなる秩序、一つの深い複合として目的を見透す見方である。それはより具體的なる一般への意志の意味でも

ある。意志は盲目のそれであつてはならない。より深い一般へのそれである筈である。かゝる意味で、關心なき關心としての美的態度を我々はそこに見出すを得るであらう。即より大いなる目的を感じるところのいのちの内感、存在の自らなる内證を見出すが様である。それは意志の深き意志を感じることである。

美的無關心論の第二の問題即美的觀照的態度が主觀的であることが、藝術をして現實より遠去らしむると云ふ考へ方は、深く考へることによつて一つの誤謬を伴つてゐる。即それはカツシラーもが指摘したところの主觀及客觀の實在的扱方より來る誤謬である。そしてその意味に於て導かれるところの客觀的屬性のみが實在であり現實性をもつと云ふ素朴なる實在論的考へ方の殘滓がそれである。凡ての動かざる客觀的與件をも主觀的たらしむる、無限に客觀に向ふところの力としての緊張の中にそれを把へるとき、藝術はより深い趣味の太源に交はるところのより廣い一般に向つて進み行く無限に沈み行く層性であり、意志である。主客は函數的系列として一つの渦流と成る。かゝる視點よりすれば寧ろ主觀の内面にこそ客觀の眞底、存在の露はな類型がその姿を見せると考へらるゝであらう。最も現實的なる者もがこの念々の意識の中にこそ動くとも云へやう。そこには假象的、夢幻的と云

はんには、餘りにリアルな情趣をもたらず。現今の新しきリアリズムはかゝる主客の視點のもとに出發すべきであり、又すでにその軌道の上を馳せてゐるとも云へやう。いはんやすでに創作的構造が個人的意識の領域より社會的構成の領域の上に轉換しつゝあるとき、何をか主觀と指し、何をか客觀と呼ばんとするか。より深い一般に向つて進む連續的力として、それは個人よりも寧ろ、個人を要素とする具體的な複合體、即より深き個人としての社會が、自らその内面を測る瞳をもつて藝術をもつとき、そこに見る意志は最も深いその内面の構造を示すときであるとも云へやう。かくて、美的無關心論に於いて、藝術が主觀的なるが故に常に假象的であると云ふ考へ方は、單なる素朴的實在論を追ふものとして注意さるべきであらう。われ／＼は主客の機能的構成に於いて、新たなレアルへの道を見出すべきであらう。機械美的の構造はかゝる目的の感情的把握として深い技術美を構成すると考へられやう。

美的無關心論がもつ第三の問題は、美的觀照的態度が受動的であるが故に假象であること云ふ考へ方である。これは、こゝで私は所謂ロマン派がこの受動的の意味を、甘き無爲、安易と逸樂として受入れたことを指摘して、その誤謬を反省したい。寧ろ激しい勞作と苦練の中にこそ密かなる止觀が内在するのであり、深い能動的なる注

意と忍苦、放膽と内省の中に見出すきはまれる一念の極促にこそ、初めて凡てを打まかしたる易らけき、決定したる安心があるのである。美的態度が受動的であるとするならば、一般を求めて、しかも一般に摺まれたる意識、意識の能動と所動が間斷なく交り流るゝ境に在ると云はなければならぬであらう。それはむしろ遊戯的無爲と奢侈的飽滿とは遙かにもへだてられたる境地でなければならぬ。それはむしろデイレツタントとして、マンネリズムとして、藝術の怠墮として藝術の領域より逐放さるべき烙印づけられたる群であるとも云へやう。かゝる忌しき弛緩的態度を美的態度としも云ひ、その考へ方の上に美的無關心論が立つとするならば、それは大いなる誤謬であり、十九世紀末葉より二十世紀の初頭の藝術をして遊蕩的市民藝術たらしめた混迷の罪の一半を擔ふべきであらう。そしてそれの上に藝術が立つ限りに於て、藝術はその滅亡を誇るの運命をもつであらう。

かゝる意味で美的假象論につきまどへるところの、實在と假象が相反的又並列的に對立すると云ふ考へ方は、機能概念的考へ方をもつてする時、大きな觀點の變轉をなすべき必要を見ると共に、又數個の誤謬をも持つてゐることを知るのである。要するにそれは深田博士の指摘さるゝ如く深くプラトンの二世界主義が根を降して

ゐると考へられる。寧ろ第一に、美的對象を構成する要素であるところの情趣微分 *Stimmungsdifferenziale* はわれ／＼の意志の内面に無限に稠密して、われ／＼のカオスとしての慾望の中に深いロゴスとして、より大なる目的を裏付けしめ、そのロゴスに則りして凡ての道具をして「純粹なる形」を附與せしめるところの、現實をして無限に理念に迄連續せしめる發展的傾向たらしめるものであらねばならぬ。第二には、自我の直接なる身體構成の中に創作或は觀照として、凡ての外なる自然は、内なる自然即血の構成の中に分析換算され、自然が人間の中に息づき汗ばむことによつて、即現實の中の最も具體的構造の中に把握さるゝことによつて、そこにはじめて、われわれの「情趣微分」の解析が完成さるゝとも考へられやう。第三には、かゝる深い無限な働きとしての構成の極限にのみ、眞の受動的類型があらはれるのであつて、奢移と逸はむしろその類型の對蹠にあると考ふべきであらう。かゝる考へ方の下にわれ／＼は現實と假象の間に深い連續が可能であると共に、美的無關心論の正しき解釋が可能であると信せられる。われ／＼はこゝでル・コルビュジエのかゝげたる建築美學に於ける警告について注意すべきであらう。「自らを新しく形造るこの時代の生みの苦惱とは、自らの深奥の中にひそむ調和に對する衝動の確認に外ならない。

オ、我等の眼よ見よ、この調和こそ、能率の法則によつて整理され、物理學をもつて規定さるゝところの勞働の苦しみの表示の中にその影をひそめてゐる。

この調和はその理性的根據をもつてゐる。それは斷じて氣分の氣紛れではなく、論理とそれをもつてしては測りがたき世界との關聯的構造の支配の下にあるのである。人間の勞働能力のけなげなる過重とその耐忍は現代に於ける「自然」である。そしてそれは嚴密なる意味に於ては實に解きがたき課題なのである。

機械的建築技術の創造は一つの有機體である。それは恰もわれわれの驚愕を喚起する「自然」の生産物の如く、純粹性に從ひ、たとへば生産的法則に思ひをひそめる。調和は實に仕事場或は工場から生れる生産物にある。それは所謂高等な藝術、シクステイヌにも、エレクチオンにもない。それは良心知識と精密と想像大膽及規律が生々しき結合を爲すことによつて創出するところの日々の作品中に在る。この半ば豫言的放言の中にも、今われわれは酌みとるべき多くの美學の警告をもつであらう。自我を要素とする關聯體、即社會の内面の調和が今道具ツオイグの上にその「關聯の昌型」を表はす相を、深い目的者の自己表現として見るのである。そこにこそ大いなる目的への感じを見出すと云へやう。

- (一) 深田康算全集第二卷、二六一頁。
 (二) 同 二六九頁。
 (三) 同 二七九頁。(J. Christiansen, Philosophie der Kunst, S. 190—131)

九

カッシラー的考へ方によるならば、物理的時間は空間函數に一要素が加へられたるものにすぎない。彼にとつて論理的時間は、又特殊の構造をもつ。即ち其は可變的要素より恆常的要素に向ふ力の類型としてこれを見る。さきに述べたる如く現在の状態は過去のそれに對して客觀的と考へられると同様現在の状態は未來のそれに對して主觀的と考へられる。即ち其間には單に函數的關係が存するのである。主觀と客觀とを内界及外界の區別を以て表はさうとする空間的表現は此の關係を不分明にするが故に不當である。空間的圖式として、そしてそれが一つの體系的組織をもつてせられてのみ深い問題をもつ。かゝる考へ方によつてするならば、記憶系列は、論理を構成する基本要素ではなくして、論理によつて構成せられたる一つの機構である。現在とは無制約に妥當する客觀性であり、過去即記憶系列は一定の條件の範圍に制限されたる一つの主觀性にしかすぎなくなる。しかも現在は未來に對してはより主觀的である。かくて、現在とは可變的要素より、恆常的要素に飛躍進

展する無限なる働きと力の類型と成る。現在がもつ情趣の深さ、其はそのもつ機構の機微と嚴密性への驚異である。時はそれ自身一つの藝術的深さである。即それは既に測り難き存在の祕密の機構の一つの暴露であるからである。歴史の感覺、及リアリズムの永遠なる復活には、この深い「時」の情趣があると云へやう。即時の把握、その事自身が論理的意味に於てはなしにすでに、深い存在の象徴であり、存在の情趣となるのである。全系列の部分でありながら、しかも常に全體を自己表現する有機體ルガンは即時のすがたの全貌でなくてはならない。かゝる「時」の機構に於て、記憶とは論理によつて捨離されつくされたにも拘らず、藝術の領域に於ては、その可變的要素そのものへの回顧その事が一つの情趣の類型と成る。記憶は常に美しいと云ふギュヨールの命題は寧ろ、回想することがすでに美しいと云ひ換へられなければならぬ。回想、その事がすでに存在の機構の内面の情趣である。歴史家がよく「過去を掘る」と云ふ地平は常に現在である。その上にすべてが生れ、その上に凡てが死してゐる。云はゞ常にそれは搖籃であり、常にそれは廢墟である。この最も簡單な一直線は、時が恰も無心なる様に、黙々として現在のその如く推移してゐる。その地平を掘り下げること、その中に埋もれる事實を、廢墟を、時の鏟パチナイを探ること、それが即深い歴

史の感覺である。回想の情趣は深くそれに等値である。エクワイブレンツ凡ての回想はイフイゲニアのもつ悲しき喜びを運んでゐる。うづもれたる魂の内面に、黄金の鍬を入るゝ時、うるはしきもの、面をそむけたきもの、數限りなき發掘、その事自身が私達には一つの回想の情趣である。過去、それは藝術にとつて、一つの亡びたる王國、美はしき廢墟であり、時の鏽パティナである。歴史家とはこの時の機構の中にあつて、その機構を通して、凡ての存在を見る人々を指す。回想の情趣が深いが故に、現在を感ずる事深く、未來への展望深きものがある。と云へやう。ギゾーが彼の史的大著を書き終つて、月夜庭中にあつて、その夜も亦歴史の一環たるべきを嘆いたと傳へらるゝ心境には、悠久の時の感覺の惻々たるものがある。回想より現在、現在より未來の情趣に移るには、そこには愕然たる情趣機構の轉換がある。あらゆる現在が永劫の回歸の前に悚然たるものも亦この感覺に外ならない。かゝる境地にこそ、即眞のリアリズムの極致にこそ、まさに夢にも似るところのものが往々にしてある。この凡ての騒然たる現つが、只一つの幻と變ずるところに永遠に繰返さるゝ原始よりの宗教的思想があるとも云へやう。

かくして、過去へ、或は未來へ、或は現在へのリアリズムはその對象の如何にかゝは

らずその機構そのものが特種の機能構成であり、一つの情趣をもつ。回想の甘さ、現實の滲透性そのものゝ凡てが、すでに藝術的レギオンである。こゝに新しきロマンテイシズムとしての眞の夢がある、それこそは最も大いなる關心、存在の時への關心の下に、美的無關心論が成立することを意味するに外ならない。

(1) Cassirer: *Ibid.*, S. 365.

十

機能概念的考へ方は心理的記憶表象よりの極端なる脱落を試みるが故に「自我」の意識についても、それが心理的である限りに於てつとめて之を避ける。即それはその中に全組織を具現しながら、しかもその全系列の一要素であるところの一關聯型態となる。故に普通所謂「我」と「物」とは四節に前述したるが様に、關係のすがたに於て、「自我」に關係づけられてゐる。換言すれば、自我は變化的要素としての主觀性より、恆常的要素である客觀性に無限に飛躍し連續する一型態である。もう一度繰返せば、一の法則が更に進歩せる廣い領域に妥當する法則によつて置き換へられる時、前に客觀的と考へられたものが全く他の主觀的なるものに變化する。即さきに無制約的に妥當してゐたものが一定の條件の範圍に制限される。かゝる妥當の階段性

に於て、主客は分離すべからざる函數的關係を構成する事と成る。かゝる關係構成が「自我」ともいはるべき關係である。

自我を一つの個體と考へ、客觀を一つの實在的存在と考へ、その客觀の中に「自我」を見出すと云ふロマン的思想の後繼者である感情移入論は、かゝる機能概念的考へ方に換算さるゝにあつて、先づ「自我」の思想が躓きの石と成る。寧ろ「自我」とは多くのレギオンに於ける相似的關係の無限なる射影にあつて、かゝる複雑なる關聯をして可能ならしむる關係そのものを意味する。感情移入とは關係の一領域に見出す一構成が、無限にまで他の領域に射影してやまぬ波紋であり、「力の類型」[Typus]であるとも考へられやう。

かくして、思惟領域では自我は射影の涯の極限概念としてしかその對象となることができないけれども、情趣の領域では存在の類型の一つの暴露として深い意味をもつ。自我を思ふ事はすでに一つの無限の情趣である。それを限りない憎しみをもつて、限りない愛着をもつて、それに對するにもせよ、すでに自分を想ふ情趣は深い一つの愛憐である。存在の内底への錘の糸である。一つの關係である。無限なる發展と飛躍である。論理の世界に現在はない、それは情趣の領域にのみそれが見出

される。丁度その様に、論理の世界に自我はない。只情趣の領域にのみそれが見出される。

こゝに今更に問題となるのは自我の一面を構成してゐるところの身體の問題である。身體の構成の概念は特殊の構造を持つてゐる。それは一面より見れば「自然」である。又一面より見ればそれは「自我」であるところの興味ある構成體である。

私は既に五節に於て、存在は一つの實驗である、と云ふ命題を提出して置いた。その意味は、凡ての存在がその機能によつて成立してゐる限りに於て、その機能性の極限體としてそれがそこに在るのであつて、機能として不完全性があらはるゝ時、それは存在性を失ふ。技術家の所謂極限存在性 Existenzminimum の思想が即それである。凡ての存在はその標準スタンダードであり、その意味で類型タイプ、様式シユタイをもつといはれる。

この標準化の精神は道具の領域、人の技術の領域に於ては深い問題をもつも、或は自然領域には何の關係もないと考へられ易い。しかし、私はこゝにダーウイニズムの哲學的反省によつて、凡ての生物的存在が目的的構成をもつこと、そして現在のその類型はその永い歴史の上に於て一つのモルフエ標準的類型である事を見るであらう。かくして、その存在性は一つの實驗性をもつてゐる。生物函數論の將來が約

束する如く、それは多くの要素の實驗的複合であることを示す。現在の貝類は現代の類型としての貝類である。かゝる意味で人體も一つの現在の類型としての様式であり、一つの實驗である。その回想と未來が衛生學のもつ理念である。又無生物としての自然體も氣體、液體、固體等の機能として、物理學によつて數學的分析をなされる如く一つの複雑なる構成體である。固體が液體に對してなす機能構成、又氣體の運動の關聯等のものが即自然風景である。それ等について、等値的、情趣評價がなされる場合、それが感情移入である。例へば山岳が垂線に向つて機能的構成をなす場合、身體は垂線に向つてなす自らの身體的機能感覺をもつてそれを測る。機能の相似的射影である。自然構成の身體的構成への射影であり、換算である。山を自らの中に汗ばむことである。人はよく山の精靈、水の精靈、火の精靈と云ふ。即ちそれは機能の純粹なる摘出と浮彫を意味する。ニイチエの云ふ「重壓の精は山にも海にも雲にも、涯は人の魂の内面の上に擴る限りない垂線の一つの意味である。」垂直の意識は一つの直接なる意識である。その直接なる意識が自ら現はるゝことによつて、背後に、或ものを豫想するのである。²⁰人は音に高低をもつ様に、人格に高潔と低劣をもつ。空間に換算さるゝよしもないものに持つかゝる感じには、情趣の對象界に

見出す機能としての高さそのもの、低さそのものを持つとも云へやう。云はゞ音の荒さ、言葉の粗さ、ふるまひの粗さ、人格の粗さ、官能の粗さ、海の荒さ、山の荒さ、地の粗さ、そこになべてのものゝ中に見出すラツフなるもの、そこに情趣の見出す對象性の機能がその片鱗を見するとも云へやう。かくて、身體は自然の機能の内面、生物の機能の凡てを測る一つの機微なる尺度と成る。そして、その計量の結果をもつて、人は情趣と名づける。

身體をもつて、一つの生物的構成と考へるならば、それは有ゆる機能の複合體である。その機能を補足し、倍加する構成體が即道具及機械の概念である。打撃の機能をもつ拳が、石を用ひ、鐵槌を用ひ、遂に巨大なる蒸氣鐵槌と成るに至る過程は即この機能の發展の意味に於いて身體の擴大射影であり、巨大なるロボットの出現である。飛行器と人の跳躍艦船と游泳、レンズと眼球、ラジオと鼓膜並に聲帶等々の構成は自然構成より道具、道具より機械への機能擴大への過程である。そしてすでに後者の領域ではその表現及感受の凡てが、個人意識の領域を越えて、集團構成の社會性の上に成立する。そこに身體構成は分ち難き溶融をもつて社會的集團構成の中に滲潤して行く。そしてこれまで個性の名をもつて基準とせし個體が、今は性、格の名をも

つて基準とする集團性が巨大なるその外貌をあらはすに至る。表現にも觀照にも藝術は大きな變革をこゝに蒙つた譯である。レンズの見出す新しき美機械の見出す新しき美、所謂現今の技術美とはこの性格的美の上に構成さるゝと云へやう。

かくて身體が無限の機能の複合體である意味で、その機能運用の評價的判斷に於て、換言すればその目的性の反省的判斷に於て、純粹に身體内部の感覺にうつたへる立場がある。即ちそれは内感としての舞踊演奏、作法及あらゆるスポーツに於ける筋肉操作の興味がそれである。イキ、コツ、呼吸等のもつ心境である。これは水泳、ラニングの如く道具のない只自然構成の中に生物的機能として適應する場合と、劍道、弓道、ボート、ラグビー、野球の如く道具をもつてする場合、或は宗教的或は道家の所謂禮の一種、作法の如く行住坐臥の機微なる心境の把握等がそれである。こゝに至つては「坐ること、それ自身が深い内感としての評價對象と成る。其に準じてあらゆる動作が常に道に關聯する。劍をもつものにとりてはそれが一つの宗教的情感をさへ導くところの評價對象である。かゝる境は即ち人が自らの身體及筋肉の内面に於て、あるべき機能の適應境を測知することである。所謂「呼吸」イキのもつ意味、息の亂れの調ひ、その一念の極促を通して、自然の風物に滲透せんとする境、そこに深い

東洋のもつ意味があるとも云へやう。かくて、この身體機能の調整は云はゞ自然として、の身體の標準的存在の發見である。云はゞ物になり切つた境である。

カントに於ては「自然の技巧」Technik der Naturの概念は彼の第三批判の出現に對する可成重要な史的要素と成つてゐる。彼に於て「自然の技巧」とは、主觀の認識すべき現象自身の中にすでに理性的合法則性が内在する事を意味し、即客觀の中にある自由性を意味するのである。そして、それへの端的なる反省 bloss reflektieren が美的感情を構成するのである。かゝる意味で「自然の技巧」は「理論的」と「實踐的」の中間者として、換言すれば素材の理性的合法則性への信頼と直觀に於て重要性をもつ。この場合、私達はその「自然の意味を」人間の身體構成即ち内なる自然にまで、その内包を延長するならば、そこにカントが餘りにもプロテスタント的に捨去りすぎたる有機感覺に對して、合法的顧みが出来たのではないかと思はしめるものがある。筋肉が、筋肉自らの行爲をその内面の神經をもつて評價し、そこに見出す深い合法則性を端的なる反省をもつて把握すること、そこに「自然の技巧」への眞に純粹なる直感があると云ふべきであらう。何れの藝術もが所謂「技巧」と云ふところのもの、腕の内面の構造には、常にこの内なる「自然の技巧」即筋肉操作の洗練性への深い信頼があらねばなら

ない。そこにはじめて、訓練練習、慣老、大熟、寂びの意味があると云へやう。或は寧ろ凡ての創作の内面には有ゆる外なる「自然の技巧」が内なる「自然の技巧」を通つて、そこに新しき美の現象が生するのである。自然美と藝術美の區別は一度この血によつて構成せる自然の技巧、呼吸によつて構成せる自然の技巧を、それが通過したか否かに在る。即ち全自然が人間の中に息づいたか否かに在る。

自然になり切りたる身體、亂れざる息調の心鏡に廓然として映る自然の内面、そこに即ち藝術の境が見出される、自然に映さるゝ自然、そこに深い自然の省みがある。眞に孤獨なる自然の己れ自らへの無盡なる瑜珈がある。技術の意味はこの自然と自然の切斷に鑽り入る無限の連続である。自然が自然そのものより隔てられたる隙虚に畫布がすべり入り、畫布がそれを充すとも云へやう。存在が存在より隔てられ、在るすがたが一つの問であるとすれば、畫布の設立は一つの問の設立である。存在が存在の機能の内面にすべり入りたき一つの願である。かくて白い畫布は常に未だ問はれざる一つの疑問記號フレイクツァイヘンであるとも云へやう。それは假象の構成ではなくして、存在の本質への問である。

かくして、それが好拙を問はず、創作する事自身が存在の全系列を一要素の中に映

し、しかもその一要素が存在の全貌を表現するところの深い機構である。即ち人はそこに創作それ自身の情趣をもつといへやう。それは自然美及藝術美の觀照とは異なるどころの領域即技術美のもつ深い愉悅である。あらはすこと、それはすでに深い喜びである。カッシラーが指摘する様に、心身の關係はその關係そのものが存在の機能關係の象徴的な原型 *Urform* であり、範型 *Musterbild* である。⁽¹¹⁾ その充全なる關係は存在機能の完成である。表現の愉悅はその機能性にある。そしてこの技術美の内面に於て、身體は自然美と藝術美の切斷の隙虚を度る意味深き中間者と成る。そしてその獨立したる純粹なる技術美をわれは内感としての舞踊、演奏、制作、作法、スポーツとしてもつと云ふべきであらう。そしてかゝる機能美としての内感に對して、美學はそれにふさはしき注意を與へる必要があると考へられる。

(一) 植田博士「藝術哲學」六七頁。

(11) Cassirer E.: Philosophie d. symbolischen Formen. III. Teil. 117.